特集2

「保護司」になって思うこと

地域で、罪や非行からの立ち直りを支えるボランティア、保護司。しかし、誰もが初めから強い決意を抱いて保護司になったわけではありません。「まさか自分が」――驚きや戸惑いを胸に、それでも誰かの「やり直したい」という思いに寄り添う一歩を踏み出した〝あの日〟。この座談会では、保護司として長年携わる石狩地区保護司会の3人が、活動の原点を語ります。このまちに暮らす一市民の彼らが、保護司として日々何を感じ、対話を重ねているのか。その素顔に迫ります。

――保護司になったきっかけは？

花田会長　祖父が保護司で、こどもの頃から保護観察対象の方が家に来る環境にあったんです。その後、祖父から別の方に引き継がれ、私が50歳になる頃、その方から「おじいさんから預かっていたので返しますね」と。それが今、私が保護司をする本当の理由です（笑）。

花田副会長　私の場合は、保護司にならないかと声をかけられたのが夫だったんです。でも、夫が忙しくてできないから、私にやってみたら？と言うんです。それで、主婦にもできますか？と尋ねたら大丈夫だと言うので、お引き受けしました。

伊藤さん　私は、郵便局長をしていた頃、近所の先輩保護司2人が職場に勧誘のため現れまして。「できない」と何度も断ったんですが、「あなたは保護司に適任です！」と言われた時、心が揺れて。妻にも「そんなに必要とされているなら引き受けたら？」と背中を押され、これはもう逃げられないと諦めました（笑）。



伊藤好美 さん
石狩地区保護司会 会員。かつて石狩花川南一条郵便局長として地域に貢献し、平成19年からは保護司も務め、郵便局長時代から培った地域への深い愛着と対話力を生かし、対象者をサポートしている。

――活動前に不安はありましたか？

花田副会長　ありませんでした。それぐらい保護司のことを知らなかった、ともいえます。

伊藤さん　私もよく知らず、他の人に聞いたり調べたりしたら、とても自分には引き受けられないと思いました。

花田会長　私は身近で見ていたこともあり、それほど不安はなかったです。このまちは比較的小さなまちですから知り合いも多く、その点は安心でした。

――初めて活動した日を覚えていますか？

花田副会長　まずは「環境調整」といって、本人が施設や刑務所にいる間、事前に身元引受人のところに行って話を聞くんです。お世話をしてもらえるかを確認し、それを保護観察所に報告したら、いよいよ最初の面談の日を迎えます。初回は身元引受人と対象の方が一緒にうちに来るんです。すごく緊張したことを、今でも覚えていますね。

伊藤さん　私は現役で働いていましたので、面談は土・日曜の夜のみ。当時は忙しくて、性格的にもあまり

石狩地区保護司会

石狩保護区（石狩市・当別町）の保護司で構成し、現在20人が在籍。ボランティアとして、罪や非行から立ち直る人を支え、地域の安全を守るため、犯罪予防を呼びかけ、地域の幸福と公共の福祉への貢献を使命とし、日々活動しています。

平成30年には、保護司会が地域と連携し、立ち直りを支援する拠点「石狩地区更生保護サポートセンター」を開設しました。開所中は保護司が常駐し、地域連携や保護司活動の支援を行っています。



日 ～12月末まで：月・水・金曜 10時～16時
令和9年1月～：火・木曜 10時～13時
※祝日・年末年始除く

所 石狩地区更生保護サポートセンター
（花川北6・1 石狩商工会館1階）

問 ☎62・9136 FAX 62・9138

こだわりがないというか、淡々と過ごしていたというか…実は最初の頃の記憶はあまりありません。

花田会長　私の場合は、対象の方が私よりも年上のベテラン(?)でしたので、「先生、先生」と言わて困りましたね。まあ、こちらも初めてで分からないことばかりでしたから、向こうが勝手にどんどん話してくれて助かりました(笑)。

――保護司として重視して取り組むことは?

花田副会長　約束どおり面談に来てもらうことです。「もしも仕事や急用ができて都合が悪くなったら、必ず連絡すること。そういうことを私たちは観察所に報告するから、日にちや時間を守ることが大事だよ」と伝えています。

花田会長　仕事が継続できているかどうかも重要ですね。そのあたりを最初に聞くんですが「今、どんな状況?」と静かに聞くようにしています。

伊藤さん　私は、本人が起こしてしまった事件について、こちらからはできるだけ触れないようにしています。いわゆる世間話が多くて、余計な話もするので、私の面談はたぶん長いんじゃないかな?

花田副会長　面談は30分とか40分ですね。

花田会長　話が盛り上がって1時間ぐらい話す時もありますけど。

伊藤さん　そうですか! それなら私は普通ですね(笑)。

――面談を自宅以外で行うケースも増えているようです。

花田会長　石狩商工会館にある「更生保護サポートセンター」は1、2度利用したことがあります。

伊藤さん　私も。

花田副会長　私はまだ一度もありません。ただ、新しい保護司の中には、プライバシーの観点から自宅に対象の方を呼ぶことに抵抗を感じるらしく、サポートセンターで面談するケースが増えているようですね。



花田和彦 さん

石狩地区保護司会　会長。石狩八幡神社　宮司、現職の石狩市議会議員(第11代・第12代議長)として多角的に地域社会を支える。平成19年から保護司を務め、長年にわたり社会復帰支援の最前線に立ち続けている。



花田美保子 さん

石狩地区保護司会 副会長。平成18年に保護司となってから今日まで、主婦としての温かなまなざしで、対象者の心に優しく寄り添い、面談などを通じて、その一歩一歩を静かに見守り続けている。

――保護司になって変わったと思うことは?

伊藤さん　保護司としての自覚から、車の運転が慎重になったと思います(笑)。あと、言葉遣いにはとても気を付けるようになりました。

花田会長　それは確かにありますね。

伊藤さん　保護司ほど、誰かの人生に寄り添うことはないのでは? とても得難い経験だと思っていて、人として本当に勉強になることばかりです。

――保護司として喜びを感じる時とは?

花田会長　対象の方には、基本的に贖罪(しょくざい)の気持ちがあります。だから最初のうちは暗い感じで来るんです。でも、仕事が軌道に乗って、穏やかな日常を取り戻すうち、徐々に話す言葉も話題も明るくなってくるんですよ。そんな変化を見ると、保護司としてとても喜びを感じますし、安堵(あんど)しますね。

花田副会長　私は、支えてくれる家族や恋人、身内がいる方は更生が早いと感じているんです。だから、対象の方が結婚して「妻です」「こどもです」などと紹介してくれた時は、本当にうれしいですね。

――最後に、市民の皆さんにメッセージを!

伊藤さん　私は保護司になって、実は犯罪が身近にたくさんあることを知りました。でも、多くの人はそれに気付いていません。保護司として過ちを犯した人たちと会っていると、それではいけない、と感じるんです。「社会を明るくする運動」などで啓発活動もしていますが、なかなか関心を持っていただけません。できれば防災と同じように、保護司への活動にも目を向けてもらえれば、巡り巡って犯罪も減るのではないか、と今は考えるようになりました。

花田会長　保護司制度は大変良い制度だと感じています。昔の〝世話役〟のような存在は、やっぱり必要ではないでしょうか。

花田副会長　保護司仲間で集まった時も「この制度は必要だよね」という話になりますね。

伊藤さん　保護司になって20年が経過しました。保護司であることを、私のこどもたちが自慢にしてくれていて、「ああ、続けてきてよかった」と心から思っています。ぜひ、皆さんも私たちと一緒に保護司として活動してみませんか?